

Ela Kazan

エリア・カザン
代 役

村上博基訳

Hayakawa Novels

THE UNDERSTUDY

by Elia Kazan

Copyright © 1974

by Elia Kazan

First published 1977 in Japan

by Hayakawa Publishing, Inc.

This book is published in Japan
by direct arrangement with
Stein and Day, Inc.

代 役

昭和52年10月31日 初版発行

著 者 エリア・カザン

訳 者 村 上 博 基

発行者 早 川 清

発行所 株式会社 早川書房

東京都千代田区神田多町2-2

電話 東京(254)1551(代)

振替 東京・6-47799

印刷 株式会社享有堂印刷所

製本 株式会社 明 光 社

定価 1600円

0097-902010-6942

代

役

日本語版翻訳権独占
早川書房

© 1977 Hayakawa Publishing, Inc.

思いもよらぬ可能性を
見抜いてくれた
ソルに捧げる

本書に登場するのは、以下にアルファベット順であげる人物を除いて、すべて架空の存在である。

——エドワード・オールビー、マローン・ブランド、アロン・コブランド、ウィットリオ・デ・シーカ、ボブ・フォッシー、ジュリー・ハリス、ハル・ホルブルック、サム・レヴィン、カール・マルデン、ジョゼフ・マシキウィッツ、メアリー・マーチン、エセル・マーマン、デイヴィッド・メリック、アーサー・ミラー、マイク・ニコルズ、ジョゼフ・パップ、ジェイソン・ロバーズ、リー・ストラバード、ロバート・ホワイットヘッド、テネシー・ウィリアムズ、それにビヴァリー・ヒルズ・ホテルのボロ・ラウンジの給仕。

1

「どんな芝居にも最後の見せ場がある」というのが、わが友シドニーの口癖だった。「最後に自分がとどめを刺せるなら、途中で殺せなくてもいいし、とどめを刺せないならそれまでにどんな名演を見せてもなんにもならん。肝心なのは最後だ」

何年か前これをいわれたとき、正直、あの人の口からきくのは妙な気がしたものだ。というのも、愛すべきシドニー・シュロップバーグじいさん——ミスター・キャスルマン、ご記憶だろう、四〇年代には大スターだった——は、自分の登壇場面では、きまって銀行破りなみの派手な芝居をやっていたからである。じいさん、すっかり演技過剰になつていたので。

「不況時代」と、彼はわたしに語りきかせた。「ほかにな

にもないときは、パレースクの主役をつとめたものだ。な
いていが台本もなし、なにもなし、お古い芝居を顔面もな
くやるわけだ。しかし、かぶりつきの常連は、大詰めがく
ればわたしが舞台中央に歩み出て、それまでためておいた
ものを一気にぶちまけることを知っている。連中、それを
爆発の段とよんだものだ。ラグス・ラグランドなんて、き
みらのひと時代前だから、見て、まい。あのコメディアン
の見せ場がそれだった。わたしもそれでもって、最後大詰
めの独壇場でもって、評価されたんだ。

本格物？ おなじことだ。たとえばリア王——わたしは
二十七歳ではじめて演じている。セカンド・アヴェニュー
では、ヘリア王はかならずあたるんだ。あれの場面は
どれも、イディッシュ語でやるとよくわかるんだが、文句
なしの盗作者ウィリアム・シェイクスピア君が、同業者か
ら失敬したくそつたれごとのよせあつめなんだ。家族問題、
父と子どもら、出来の悪い娘らと、いい娘、身内の悶着、
最良の友は盲目——およそ安手なしのものばかりだ。とこ
ろが、最後へきてウィリアム坊やは、どうしていいかわか
らなくなり、舞台のまんなかで主役をおぼりだす。娘も
おぼりだすんだが、これにはくだらんものはくつつけな
い。老王にもあまりごちゃごちゃ背負わさない。いつか本
を読んでみる。つまり役者におつつけてしまふというわけ

だ。「行っておれの顔を立ててこい」てのが、作者の本音だ。

わたしははじめてあの役をやったとき思ったね——荒野の場面さえうまくやってのけたなら、客の耳を道具方がキャンパスをひっぱたいて鳴らす雷鳴音にでなく、おれのせりふにひきつけたなら、こいつはいただきだ、とね。あそこだよ、《リア王》の爆発の段は。おいおい、きいてるのか」

彼、シドニー、わたしの父親がわりは、終始わたしにはうるさい人だった。芝居の世界に手引きをしてくれてからというものの、いちども手綱をゆるめなかった。のちに、わたしがプロデューサーのひっぱりだこになり、自分には仕事がなくなくなったときでも、ショー・ビジネスばかりか、人事百般に意見を怠らなかつた。

「わたしはきみを見守ってるんだ」というのである。「待っているんだ。こいつはいつ花ひらくんだろうとね。なるほどメーカーキャップはよろしい、発声もよろしい、機敏最後列の客にはきこえぬながら声もよろしい、笑いかたも悪くない、先の上向いたみじかい鼻といい、ブロードウェイのスターになる要素はぜんぶ持っている。ないのはなにか。いちばんだいじなものだ。あの燃える火を持っているか。どうだ。いつそれを見せてもらえるんだ。こいつのいちば

んいいところをいつ見せてもらえるんだ、と心待ちにしている。

心配なのは」と、シドニーはいうのだった。「もしかして、それがないんじゃないかってことだ」

それはわたしも心配だった。わたしにあの激情があるだろうか。クライマックスをこしらえるに必要なものを持っているだろうか。そりゃ、毎シーズン出演してはいるが、まだ大スターではなかった。わたしの演技はいつも説得力があり、秀逸でさえあったが、その種の評言はご存じのとおり月並みを意味する。

シドニーじいさんがもとめるのは、もっとべつのものであった。わたしが舞台での気迫に欠けるだけではなかった。

実生活での情熱に欠けるというのだ。シドニーのいう芸術家らしいふるまいをしていなかったのである。「だいたいきみは、いつも円満すぎるのがけしからん」と、彼は文句をいった。「だれにもけむたがられないじゃないか。きみは仲よしこよし主義者だ」

わたしはこれを妻エリーに話した。

「どうしてだれにもけむたがられなきゃいけないのよ」と、彼女はいった。

「彼がいうのはそういう意味じゃない」

「円満なのがどうしていけないの。だいたいがそういうい

かさまなのよ、あなたの友だちは」

エリーはシドニーのこととなると、ことごとく反対した。彼女は板のようなやせぎすで、コネチカット州ハートフォードの旧家の出、父親と母親というのが夫婦でおなじ顔をしている。エリーは誇張にはひどく厳しく、誇張をうそとみなす。「あなたもあんなふうにおちぶれたくはないでしょう」と、彼女はいうのだった。「それに、どうしてあなたに情熱がないとわかるの。あの人、あなたと寝たことあって?」

「そういう意味じゃないさ」と、わたしはこたえる。

シドニーはよくわたしの服装をからかい、芸術家でなくて株仲間人だといった。

「ばかばかしい」わたしがいうと、エリーは言下にいった。「芸術家はどんな服装をしなきゃいけないというの。アビー・ホフマンみたいな格好? それとも、あのシドニーのくそじじいみたいななり? いっとういてよ、ご当人の格好こそ気に入らないって。だいたいあの人、どうしてクリーニング屋にたのまないの。スーツの襟に去年のスーツがこびりついてるじゃないの」

エリーは街でローレンス・オリヴィエに出会ったときのことをもちだした。「あれでだれか知らなきゃ、学校の先生か、弁護士か、なにかお堅い商売の人に見えたじゃない。

イギリス人のいういい身だしなみのどこがいけないというの。清潔でけつこうじゃないの。そうよ、きれいでいいじゃないの。役者が世間なみのふるまいをしてどこが悪いの」

エリーは以前ピアノの修業をしていたのだが、ある悲しいできごとがあつてから、コンサート・ステージへの夢をすて、練習もやめてしまったのだ。友人づきあひもなく、つきあう気もさらになかった。わたしの芝居仲間、もつと情の深い女を再婚相手にえらべただろうことをほめかした——シドニーはすけずけいった。彼らはエリーの固い表情とスチール・フレイムの眼鏡を見ても、その眼鏡をはずしたとき頬を染める微妙な赤味——手を出してもいいわよという合図——を見たことがない。彼女が燃えたとき瞳にやどる、あのへただあなただけへの光を見たことがない。エリーは燃えあがるのに手間どるが、ひとたび熱したら、電気毛布の下で身も世もないのだ。

一方で彼女は、自分の信念を一步もゆずらぬ潔癖家であつて、演劇人のなれなれしさ——「ダーリン!」——「スイートハート!」——を嫌悪する。「あたしはああいう、へんな見てちょうだい、わたしたちはこんなに幸福です」式のゲームはいや」というのだった。「あなたとあたしがふたりだけでやることは、ふたりだけのことよ」

その点、最初の妻は、人前でもわたしにべったりだった。あれは舞台でも実生活でも女優だった。おまけに人間さるだから、金は湯水のようにこぼれ出た。エリーと再婚したとき、わたしの銀行通帳の残額欄は zero だった。エリーはわたしの生活設計をしてくれた。毎週給料小切手を渡すと、彼女がちゃんと支払いをし、ブルー・クロスやブルー・シールドなど健康保険類の滞納をせぬようにし、わたしにこづかいを持たせてくれた。笑うなかれ。シドニーにもだれかそんな女がついていればよかったのだ。

シドニーは、秩序の欠如が人をどこまでだめにするかという好簡の見本である。ミスター・シドニー・キャスルマンといえ、お忘れだろうか、かつてブロードウェイのトップ・スターのひとりだったのだ。ブラザ・ホテルに部屋を持っていて、わたしはよくエリーとふたりきりのマチネーのために、昼間借用したものだ。当時ふたりとも世帯持ちで――

ちなみにエリーは、そんな密会にさえ、いかにも完全なるレディらしいやりかたをした。「これがあたしの生涯最後のうそ」彼女は投資カウンセラーである前夫に、その日の予定をどうつづけてきたか、わたしにおしえた。「買い物よ」

エリーは当時のシドニーの部屋をさして、人のすまいが

こうまで乱雑になるのは、ただひとつのことを意味する、すなわち墮落がはじまったのだ、といいきった。はたしてそのとおりになった。シドニーはすでに坂をすべりだしていたのだ。証拠――ひげそりかすのたまった洗面台、毛氈には前夜脱ぎすてたままの衣類、戸棚の奥には二フィートも積みあげられた汚れ物。エリーはシドニーがどういう道をたどるか予言した――寸分たがわず。

わたしはシドニーが、大物エージェント、有名プロデューサー、有力批評家、コラムニストたちにたいし、ぞんざいになりすぎていることを警告したのだが、彼はそんなわたしを妄想狂だときめつけて、「みんなそれはそれはいい友だちだよ」というのだった。

ところが、時いたるや、そのそれはそれはいい友だちが、ひとりまたひとり、彼の生きた肉体を食いかじったのだ。どすれば――わたしが妄想狂といえるだろうか。

よろしい、妄想狂だとしよう。滅びゆく職業にたずさわる者はみなそうではないのか。われわれには永続するものはない。成功にしたらがそう。いちばん上といちばん下のへだたりは、ファット・クライヴのコラムのいちばん上といちばん下の差ぐらいしかないのだ。それはそれはいい友だち。われわれはみな、彼らのナイフを腹につき立てられた経験を持つ。

いいだろう。わたしは妄想狂だ。職業俳優はみなそうなのだ。

エリーはわたしに、なにかしばらくは持続するものがありそうに感じさせた、わが生涯最初の人だった。

誤解しないほしい。わたしはブロードウェイでけっこうなかせぎをあげていたし、シドニーは最後には、わたしを通じてしか仕事にありつけなかったのだ。わたしはいっぱしのスターであった。無名の作者の芝居のときは、わたしの名前がタイトルの前に出た。ときおりナレーションを入れたり、コマーシャル・アナウンスをやったりで、暮らし向きはよかった。

だが、わたしにはそれをすて去る思慮があった。おかげでいま、わたしはフロリダ暮らしの身分である。

シドニーはあちらで、ニューヨークで死んだ。みじめな死にかただった。

わたしが生きのこった理由のひとつをいおう。それは、わたしのような役者だったからだ。わたしは三十男から八十のどんな老人まで、どんな役も演じることができた。生まれつきがひねた顔だが、いまでもベルトはサイズ34というのをしている。ある日のことを覚えていて。わたしは母の楽屋にいて、母が化粧するのを見ていたが、鏡のなかで母がわたしを見て笑っているのに気がついた。

「なにがおかしいのさ」わたしはきいた。十二歳でずいぶんおこりっぽい少年だった。

母はまずわたしにキスをしてから、「だってサニー、おまえは年寄りのような顔をしてるんだもの。でも、ママはこの顔が好きよ」

坊やはわたしのニックネームで、それがどこまでもついてもまった。

六年後、わたしはイェール大演劇科で父親役ばかりやっていた。ブロードウェイでの当初の仕事は、シドニーがやるような老人役の代役稽古だった。のちには自分でそういう役をやった。わたしにとってなぐさみは、ポール・ムニだった。あの俳優は、年齢がだんだん顔に追いついたのだ。わたしもとしをとるにつれ、年齢相応の役を演じるようになった。三十七歳でエリーをえた。

そういうわけで、最初からわたしの役どころは性格役だった。わたしは職人であり、シドニーのようにある日とつぜん時代遅れになりかねない、たんなる舞台役者ではなかった。よく合うかつらの使用法や、髪をあらにすこしくわえ、こちらからすこし減らすことで人の顔がどれほどかわるかなど、わたしほど知っている者はいなかった。イギリスでは、大物がみなそれで生きながらえる。オリヴィエ、アレック・ギネスしかり、ジョン・ギールガッドしかり、

ラルフ・リチャードスンしかり。べつにひきくらべる気はない。

老優となったシドニーは、ひとつの典型ではあった。しかし、六十六歳、太鼓腹のユダヤの老牛を、だれが主役にほしがらう。それもブロードウェイで、いまの時代にけれども、ああシドニー、おおシュロックスバーク、わたしはあの人がなつかしい。ほんとになつかしい。

一九四二年、イエールを出たわたしは、演劇界に足を踏み入れた。おそらく母が芝居をやっているからというだけのことだった——ふつうは逆ではなからうか。いずれにせよ、決断なんかした覚えはない。ただ、自分は役者なのだと、すんなりうけいれただけである。

だから、兵役義務があったにもかかわらず、ニューヨークへ出たわたしが最初にしたことは、エセル・バリモア劇場の楽屋をたずね、へきつと軌道にのせてくれると母が請け合った人物に、一年以上前の手紙をさしだすことだった。このつては、母のなによりも貴重な遺産であった。彼女はイエール大のつぎに、シドニー・キャスルマンをわたしにあたえてくれたのだ。

おからシドニーの芝居は、一年半のロングランの最後のマチネーと夜を迎えようとしていた。わたしはほんの一

分、できれば十分も会ってもらえればと思ったのが、なんとミスター・シドニー・キャスルマンのそばで、正午から翌日午前二時まですごすことになった。

その晩、わたしはスターとはどういうものかを知った。

シドニーの世話係で、オリヴァーというでっぶり太った黒人に案内されて、楽屋口から主役化粧室までの赤絨毯を踏み、しずまり返った楽屋区を通った。

シドニーはふだん着を脱いで、胸にメーキャップのしみがついたグリーンのチャイナ・シルクのガウンに着がえているところだった。いまでも覚えてるのは、その肥満ぶりと、まるまるした肩と、まっすぐで力強いうなじ、ふさふさした頭髮——わたしのはどんどん薄くなりだしていた——そして、晩年かかえて歩いていた脂肪の巨塊を思えばうそのような、そのひらべったい腹である。

わたしたちは楽屋の長い鏡の前にならんですわり、彼はメーキャップにとりかかった。彼は母のことを情愛こめて語り、母が当然世に認められていいのに認められなかったことを嘆き、自分にとってどんなに大切な女だったか話してきかせた。彼はすでにダウンタウンではスターであったが、ブロードウェイでもスターになれると、いちばんいつてほしいときに母がいつてくれたのだという。ブロードウェイのスターは、当時のユダヤ人俳優だれしもの夢であつ

た。どうやら彼は、わたしを知っていること——彼が母の愛人だったことを、思いださせたかったらしいが、あけすけにはいわなかった。

ドアに遠慮がちなノックがあつて、コール・ボーイの声で、「ミスター・キャスルマン、三十分前です」とつげると、シドニーは舞台監督をよんでシグナル・コンソールの下に椅子をおかせた。わたしに大入りの芝居を舞台裏から見せようというのだった。

いまでも覚えてるが、舞台へ歩み出て喝采をうける前の最後のひととき、シドニーはステージ・ハウスのいちばん暗い隅を行きつもとどりつしていた。ひとりつぶやき、うなずき、向きをかえながら、先の場面を頭のなかで演じては、いまから演じる場面にそなえているらしかった。

彼のクライマックス・シーン、彼の『爆発』をわたしは忘れない。大会社の同僚重役連に向かつて、いまやあたらしい世界である、ひとつの世界である、労働者の要求は経営者のそれと同等に尊重され満たされるべきである、とぶつてショックをあたえるくだりである。なにぶんあの時代のことだ。枚敷の拍手がなんども彼のスピーチをささげつつたのを覚えている。はじめのうち一階最前席は沈黙し、不快がつてさえたが、やがて彼ら四ドル四十の席からも万雷の喝采がわき起こり、主役の熱情と芸をたたえた。

終演後、シドニーは前代未聞のことをやった。いまおわったマチネーと、その芝居の最終上演である夜の部のあいだに、リハーサルを召集したのである。彼は舞台にあつめた出演者一同に向かつて、興行がおわることはだらしのない芝居、へいかさまな芝居をするいいわけにはならぬ、と叱りつけた。とりわけそのころラジオからきたばかりの若い女優に、演技指導をはじめた。耳元に口をよせて彼女の役をやつてみせ、彼女の演技がどれほどいたらなかったかをおしえた。じつにロングランの最終日である。

メモ帳と鉛筆を使うちょっとした所作では、彼はなんともくりかえし説明し、それだけの小道具でいかに多くを語れるかをおしえた。ついには、劇中つかの間ふたりきりになるところにおよぶと、彼は女優の肩をつかんで、もっと客に顔を見てもらえるようへ押し立てて、彼女にその場面をへあたえてやった。「わたしの客席側の目に向かつて話しかけるがいい」と、彼はいった。

そして最後に、もっと自分の才能に自信を持つてくれと、これはたのみこむ口調でいった——わたしにもきかせる気だったのだらうか。思いきつて自分自身をためせば、へあれは、情感は、摩訶不思議なものは、かならずやつてくるのだということを、たのむから信じてくれ。「自分でもびっくりするよ」と、シドニーはいつて、彼女を恥じ入ら

せ、はげました。「どうだ。え、どうだ」

女優がこたえるよりはやく、彼は相手をどきまぎさせたまま、さっと舞台から歩き去った。

そでで待ちうけていたのは、初日にその芝居をこきおろした新聞の記者だった。ロングランになったが、シドニーが初日にいったこと——「批評家は権力を持ちすぎる」——を、まだいう気があるかとたずねた。

シドニーはなにかべつのことを思いさだめようとするかのように、じっと記者の顔に見入っていたが、やおら口をひらいた。「なあきみ、わたしにいわせりゃきみは娼婦、きみにいわせりゃわたしは娼家のおやじだ」

楽屋にはマッサージ師がきていた。「舞台の前には食わんことにしている」シドニーは衣裳を脱ぎながらわたしにいった。「夕食はあとだ」彼は揉みとさすりに、肉欲者のようなうめきと吐息で応えた。おわらぬうちに寝入ってしまった。マッサージ師はふんわりした毛布をかけてやった。オリヴァーが電灯を消して、わたしに外へ出ないかたずねた。

わたしは出なかった。鼻孔にアルコールのにおいをつんと感じながら、夕明りのなかにすわり、シドニーの規則正しい重たい寝息にききいった。わたしがなになりたいか思いきめたのは、そのときである。シドニーのようにでは

なく、シドニーになりたいと思った。シドニーその人になろうと思った。生涯のあとにも先にも、愛と憧憬、贅美と羨望の、あれほど深いまじり合いを感じたことはない。

夜の部もおなじ場所から見せてもらった。あの若い女優は、退場を喝采で送られて泣きだしてしまった。舞台のそでで、彼女はわたしの胸にもたれてささやいた。「あの人のおかげよ」

それが最後の〈爆発〉である大演説をぶつシドニーは、いまだではもうお目にかかれないう芝居をやった。一步踏みはずせば演技過剰になるぎりぎりのふちを、綱渡り芸人のように進んだ。わたしには彼が、一種の陶醉にひたり、ひとつの世代を、すなわち不況をこしらえた人たちを、叱りつけているように見えた。同時に、べつの世代に、次代の若者たちに思いをよせて、アメリカはその力と勇氣と根本的善により、自国のすべての問題を、いや、全世界のあらゆる問題を、解決できるのだといきかせているようだった。もうだれがそんなものを信じよう。だが、一九四二年のその夜、人々は信じた。シドニーの芝居から真にうけた。

緞帳はまんなかで割れてかさなるフォールドオーバー式だった。それが最初のカーテン・コールであがらなかった。舞台監督助手が手で割って、ひとりだけぐれる幅にあげ